様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３６００１２

研究課題名（和文）カリブ海アジア系混血のエスニシティに関する実証的研究：クレオール再考

研究課題名（英文）Empirical Research on Ethnicities of the Mixed-Race Asians in the Caribbean: Rethinking 'Creole'

研究代表者
柴田　佳子（SHIBATA, YOSHIKO）

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：３０１８３８９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：カリブ海地域で近年やっと注目されるようになったアジア系のなかで、より周辺化されていた中国系とその混血に関する本研究の意義は国際的認知を得ている。地理的、人種・民族的構成等で対照的なジャマイカとガイアナでの現地調査、英国、カナダでの短期調査から、複数ディアスポラの多層的交錯やトランスナショナリティの重要性が明らかになった。インタビューや参与観察からの一次資料や文献・視聴覚資料から、ルーツやルート（経路）、移動背景、交婚、混血、文化混淆の複雑多様な諸側面を包含し、他の混血との共通性や差異を基に彼らのエスニシティについて批判的検討をした。それを通して鍵概念クレオールの豊饒性について深く再考できた。

研究成果の概要（英文）：The significance of this research has been internationally recognized by its focus on the Chinese and mixed(-race) Chinese. They have been most marginalized among the largely neglected Asians in the Caribbean, who have attracted serious attention only recently. Jamaica and Guyana were selected for fieldwork sites because of differences in geographical locations and ethno-racial compositions. Brief surveys were also conducted in England and Toronto, Canada. Using primary resources through field interviews and participant observations as well as literary and audiovisual materials, I found more complexities of diverse diasporas with their multiple layered crossings and the significance of transnationality. I examined their ethnicities critically by incorporating various aspects such as roots and routes, backgrounds of movement/migration, intermarriage, mixed-race, cultural hybridity in comparison with other mixed races. This has led to rethinking of the key concept Creole, enriching it.

研究分野：文化人類学、カリブ海地域研究

キーワード：カリブ海地域アジア系　ジャマイカ　ガイアナ　クレオール　中国系　混血　エスニシティ　ディアスポラ

１．研究開始当初の背景

（１）欧米中心、後に現地も拠点となり展開してきたカリブ海地域研究では、長年アジア系は対象としても軽視され、方法論も限定的で、研究全般が手薄だった。人口数で優勢なインド系に比べ、中国系への注目は特に少なかった。また、歴史学や文学など文献研究が主で、専門職、経済界・文芸などで成功した当事者による表象、研究に偏向しがちだった。

（２）カリブ海地域の混血研究は、ラテンアメリカのナショナリズムと結びつける歴史学や政治学的研究、国民文化創成など社会文化研究と類似の方法論やテーマにより、黒人と白人の混血カラードを対象に、散発的にはあった。人種・民族構成と各比率、圧倒的な黒人奴隷制、長期の植民地時代などの差異から比較は難しく、混血研究の重要性は認識されていても、実証的研究は避けられていた。

（３）19 世紀半ばから参入したアジア系の間でも混血は漸増してきたが、忌避、曖昧な境界、集団性の欠如などから、調査研究は困難だった。現地化、クレオール化に貢献してきたはずの中国系混血は、歴史研究などで若干言及される程度で、多面的研究は急務だった。

２．研究の目的

（１）同地域研究で長年蔑ろにされていたが、近年の顕著な変化に関心が高まっている中国系について、その混血含め焦点化する。中国の改革開放後、新参者（出稼ぎ、通過、定着、往還含む）による現地社会と中国系（コミュニティと個々人）への影響を精査する。

（２）重要な政治、社会文化的テーマのエスニシティについて、中国系とその混血の最近の動向から、新旧移民の相互関係、自他認識や民族境界、トランスナショナリティ、ディアスポラなどの観点から具体的に考察する。

（３）カリブ海地域とディアスポラ社会で生起、展開し、1990 年代から国内で注目されたものの、近年議論が停滞している重要概念クレオールについて、中国系とその混血の諸事例をもとに批判的検討を加え、再考する。

３．研究の方法

（１）既存の研究資料の精査、国内で新規入手可能な文献資料の検討などから考察を進め、現地調査の内容、方向性を吟味した。

（２）国内で入手不能な一次資料、現地発信情報、文献、視聴覚資料の収集のため、現地調査を行った。対象は、英語圏で人種・民族構成と比率、地理的位置で対比的なジャマイカとガイアナを選定した。筆者は前者で 1978 年から、後者で 1979 から現地調査をし、諸般の事情に詳しく、良好な人脈を築いてきたため、本調査での協力も多々得られた。また、カリブからの再移住先拠点の英国、カナダ（トロント）での短期概況調査も実施した。

（３）資料整理、分析を経て、いかなるエスニシティがどのように表面化、後景化、（再）構築、操作されるか、自他の境界、帰属意識、同胞意識、ディアスポラ、トランスナショナル・ネットワークなど検討し、エスニシティとクレオールの関連について再考した。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

①ジャマイカとガイアナでの現地調査で、新旧中国系の最新動向について、参与観察、種々のインタビュー/対話/会話などから多様な情報、一次資料が豊富に収集できた。同様の研究がほとんどないため、写真、映像資料含め、これらは今後活用価値が非常に高い。これまでの調査研究において収集してきた資料についても、特に現地当事者たちから資

料共有などの依頼などに応じてきたが、今後も同様に開示、共有していくつもりである。

②ガイアナ国立古文書館で、中国人年期奉公人に関する手書きデータの閲覧、書写ができた。移設新築された館は以前より改善された面もあったが、依然として非常に劣悪な保存管理状態のため、判別不能箇所も多々あった。記録項目、記載内容から、19 世紀後半、植民地宗主国であった英国側の中国人観は一部確認できた。ガイアナ定住者の姓には特徴があるが、その理由も上陸時氏名欄の記載から想像できた。古文書閲覧から、歴史研究書での記述に対する批判的読解への示唆も得た。

関心ある現地出身中国系は、何年も前から祖先のルーツ探しのため、これら資料の書写や写真化などもしていた。バンクーバー（カナダ）在住の知識人トレヴ・スー＝ア＝クアンなどは、中国出発港と出発年月日、経由地、到着年月日、船名、乗船名簿（人数、子供含む男女別）など含むデータを整理し直し、解説を加えウェブ上で公開している。現地でいかなる資料や情報を入手した上で、貴重な情報提供元となったのか、具体的に理解できた。これらの営為は、世界各地に広がり、現国籍は多様である中国系ガイアナ人・ディアスポラとのトランスナショナル・ネットワーク形成、拡張を可能にしていると確認できた。

彼の編著３部作は、個人、家族親族、姻戚、友人知人、小・中・高校の同窓、ビジネス・ネットワーク、コミュニティ活動（中華会館、スポーツクラブなど含む）による繋がりを活用し、中国（大陸、マカオ、香港、台湾）、ガイアナ、他のカリブ諸国、「北」の定住先（特に英国、米国、カナダ）を結ぶ。インタビューや手記の依頼などによる移民一世代～三世代の諸経験、その意味づけがライフヒストリーにより確認できた。定住化、現地化、クレオール化の様相が、全容ではなくとも、個々の当事者たちの視点から子細なエピソードとともに例証されている。同様の出版物はジャマイカ系でも少数見られ、編者（達）の人脈を駆使し、メモワールが活写されている。現在どこにいようとガイアナ在住年月の差異は大きくとも、生育地（起点、見方によっては中継地）の刻印の濃厚さが理解できた。

異文化社会での人種・民族的他者との邂逅、接触による通婚や混血の増加に関しても、現地社会の独自性や差異をふまえた個別事情の理解にも役立った。ディアスポラ研究でよく言及されるルーツ root(s) とルート route(s)（経路、経由地）の複層的関係を精査しつつ、ナショナリティを含むエスニシティとトランスナショナリズムの相互作用が確認できる資料を多々収集できた。

③ガイアナ独立前（1950 年代末～1960 年代初め、特に 1961、62 年の人種暴動期）の政治経済的不穏や混乱、1970 年代以降の（バーナム政権）「独裁化」、企業国有化政策により、大多数の中国系は海外逃避し、現地コミュニティはほぼ崩壊した。ジャマイカでは 1918 年の反中国系暴動は多数の逃避を招かなかったが、1960 年代のブラックパワー隆盛、1965 年の首都圏での暴動、1970 年代（1972 年以降）の左翼化は、人種・民族を問わず持てる層の多数の移出者を出し、中国系も大多数が海外移出し、現地コミュニティは機能不全に陥った。しかし、現地と再定住先、再定住先間を結ぶネットワークが幾重にも形成され、部分的切断はあっても、活用は続き、時に活性化もされていることも確認できた。

ディアスポラ知識人、各界成功者、指導層の主導により、近年、メモワール編纂、自伝を含むエスニック郷土史、族譜、一大家系図などの私家版、地域・流通経路限定版の出版物、ドキュメンタリー映像も少数だが出されるようになった。著者、編者、制作者とその親族などからしか入手できないものばかりだったが、大半は入手できた。さらに関連す

る印刷物、ウェブ情報なども得られた。

これら物的資料を介して構築できた新規人脈は、英国、カナダでの情報収集にも役立った。漢族のサブ・エスニシティで特徴ある客家系を主軸に非常にダイナミックな関係が展開していることを確認した。さらに、ナショナリティ優位で構成される異なるレベルのエスニシティとも複雑に交錯するトランスナショナル・ネットワークが柔軟に運用、活性化される様態を観察できた。トロントは諸関係のハブとなり、特に客家系はカリブ系が重要な役割を担っていると理解できた。

④政府公刊資料では、最新のセンサスなどウェブ上閲覧以外では、劣悪な交通事情など現地特有の環境により種々の非効率やアクセス困難が多々あり、現地調査期間内に必要情報が入手できないこともあった。

婚姻、離婚、出生など混血の個人情報は、公的資料からは部分的にしか読み取れず、法的婚姻でない「コモンロー関係」（事実婚）や「訪問関係」による出自など、現地で頻出する対象、公的数字には表れにくい事実関係の確認などは、個別インタビューなどによらざるを得ず、資料の量的獲得は困難だった。

⑤新華僑参入後、現地で生じた社会問題は、両国とも、大型開発援助とセットになった投資、現地資源管理、対人関係、現地社会の脆弱さと好都合な戦略的位置、国内格差などの複合要因で起因したものと理解した。中国企業や新華僑の進出のやり方に対し、多数の住民・国民、ジャーナリストなどから猛反発もあり、停止、撤退した件もあったが、懐疑的視線や声など余波はまだ感じられた。

問題の渦中にある時はなおさら、現地中国系個人、コミュニティは敏感に反応した。容貌など可視的相同や類似による非中国系からの一方的な「チャイニーズ」としての同類化を忌避し、ナショナリティや文化的特徴を前景化した。新華僑への複雑な心境も交じり、彼らとの差異は強調される傾向があった。

他方、無視や断絶ではなく、距離をとりながらも「彼らはかつての我ら」という認識で、コミュニティ指導層は架橋的役割を進んで担った。現地での労働、日常生活での法的規制やルールなどの遵守を求め、現実的に具体的にアドバイスし、新華僑から感謝された。言語面で意思疎通ができない現地中国系の大半は、新華僑との邂逅、接触で、現地化の進行や通婚・混血化により、自らのクレオール・エスニシティや帰属意識を問い直し、曖昧だった中国性を再確認していった。その際、生育地で核となる社会が優先的なナショナリティやエスニシティ発揚の場となる傾向が強く、クレオール性肯定にも繋がっていた。

⑥ガイアナでは展開しなかったが、ジャマイカでは中華会館所有管理の中国人墓地があり、その盛衰は現地中国系の歴史を反映してきた。特に荒廃が進んだ 1970 年代の悲惨を憂慮した在外ディアスポラの部分的帰還、資金援助や道義的支援があり、内外の知識人、技能専門家などの知、心技が動員され、大規模整備修復、個別墓地同定、美化、中国性を強調した正門、壁など境界再構築など一連の大事業が続いている。混血もその主軸に参入し、再中国化に見える同事業の展開に、混血クレオールならではの工夫が見られる。

⑦現地中国系指導層や各界成功者には、自らまたは近親者に通婚経験や混血も少なくない。容貌は両国の人種・民族構成を反映し、ジャマイカでは黒人系、ガイアナでは非黒人系の特徴を帯びる傾向はあるが、家族内でも容貌の差異が大きいなど個人差は大きい。従って、ステレオタイプを裏切る事例も多々見られる。混血性に由来する周縁性や両義性、流動性、揺れも経験しながら、非中国系より中国系的領域に帰属、接触、親密交流しよう

とし、また同調ないし協調する傾向がある。それは当該地域で、主に父系血筋を重視する中国系男性が非中国系配偶者と家族形成あるいは性的関係をもったことに由来すると考えられてきた。特に混血の子の帰属や諸関係のあり方には、中国系男性との関係が重要な鍵を握ってきたが、種々の変遷を経て諸関係も変化しうることは事例から確認された。黒人系住民に伝統的にみられた母親中心家族的関係にも左右される事例もあった。

新華僑からみると現地化、クレオール化した実態は、真正性からの距離、ズレ、異種混淆による変形などに消極的、否定的価値が付与されがちだった。しかし、現地化過程で喪失、減少や負の変化を上回る獲得、増加、創造など正の変化を積極的に評価し、謳歌する包摂的態度、言説も随所で観察、聴取された。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

従来、同地での中国系に関する、綿密な人類学的現地調査による実証的研究はほとんどなかったため、得られた貴重な一次資料や研究成果は、域内の他人種・民族を焦点化した研究との比較、ディアスポラを含めたエスニシティ、トランスナショナリズムとの関係においても、その意義を高く評価されている。それは、2017 年出版予定のカリブ海中国系に着目した論集（在ジャマイカ西インド諸島大学（UWI）現代言語文化学部と孔子学院主催の国際シンポジウムを元にした学術出版）で、筆者へのインタビューが掲載されたこと、また同年８月４日、北京で実施予定の米国ペンシルヴァニア大学主催国際ワークショップへの招待講演依頼などからもうかがえる。校務や先約の国際学会での発表との重複から実現しなかったが、他にも海外研究者からの招待、国際会議での発表を依頼されてきた。

（３）今後の展望

本研究はラテンアメリカのメスティサッへ、華僑華人研究で比肩されうるプラナカン研究などとも比較可能であり、それらを盛り込んだ成果発表も期待されている。

新華僑の参入以降、中国系の間に多重に引き直されてきた境界は、同一ではないが類似、相同の外縁の揺れ動き、自他を区別する基準の曖昧さ、国際情勢、域内外の個別政治経済状況などにも大きく規定されてきたが、今後の動向については不透明である。日常的生活実践のなかでは些細なことで否定的ステレオタイプや表象が代表性をもつことが多いが、そのような磁場における人種・民族、階級や位階、宗教、ジェンダー関係などのもつれにもさらなる注視が必要だと考えている。

また、前提さえ不問に付されるような実体化、ある種創られた伝統的言説や歴史観などを無批判に活用する動きも見られる。特に客家系の客家エスニシティ再構築や動員は顕著である。その展開にはディアスポラのトランスナショナル・ネットワークが動員され、トロント客家会議、世界華商大会、世界客家大会などと多様な連動がみられる。ジャマイカの墓地修復のみならず、祖先儀礼ガーサン（掛山）の復興、中華会館主催諸行事、代表的歴史観などにも表れている。客家を代表する土楼の壁をトロントに記念創築する計画も、ジャマイカやガイアナ他カリブ出身者と他所出身、経由の客家を巻き込み推進されているが、今後の展開はディアスポラの試金石になるだろう。トロント公立図書館主催の中国系連携プロジェクトでもカリブ海系ネットワークは不可欠とされ、筆者はその架橋、触媒にもなったが、種々の越境と混淆の足跡を辿るのにカリブ内外の混血含むクレオールのエネルギーをいかに援用できるか、綿密に調査研究せねばならない。

５．主な発表論文等

{雑誌論文}　（計１件）

① SHIBATA,Yoshiko 、Revisiting Contemporary Significance of the ‘Hakka’ among Jamaican Chinese: Multiple Chinese Sense of Belonging and Diaspora Identity、Working Paper Series, No. 3, Department of Anthropology, Sun Yat-sen University (中山大学人類学系)、2016、pp.1—33。

[学会発表] (計５件)

① SHIBATA, Yoshiko 、International Workshop “ China in the Caribbean / the Caribbean in China“ （国際学術会議）(招待)、Penn Wharton China Center、2017.8.4、Beijing, China（北京、中国）（予定、確定）

② SHIBATA, Yoshiko 、Negotiating Chinese-ness by ‘Half’ Chinese: Cases from Contemporary Jamaica and Guyana、41st Annual Conference, Society for Caribbean Studies (国際学会)、2017.7.5—7、University of Essex, UK（エセックス、英国）（予定、確定）

③ SHIBATA, Yoshiko 、Questioning 'Chinese-ness,' in Guyana: Revisiting Diaspora Consciousness, Sense of Belonging and Transnational Movement、ECOTOE : Encounters, Crossings, Communities——Imagining the Guyanas: Ecologies of Memory and Movement (国際学会)、2016.10.27－29、School of Advanced Study, University of London, UK (ロンドン、英国)

④ SHIBATA, Yoshiko 、Seeking ‘Homeland’?: Diasporic Gaze and Visual Representation of the Contemporary Chinese Jamaican、40th Annual Conference, Society for Caribbean Studies (国際学会)、2016.7.6—8、Centre for Latin American and Caribbean Studies, Newcastle University, UK（ニューカッスル、英国）

⑤ SHIBATA, Yoshiko 、Remembrance, Re-membering Changing Diasporisation of the Chinese Jamaican: ‘Necropolis’ Project and the Revitalised Ethnic Association in the Contact Zone 、Contemporary Caribbean Visual Culture Conference：Artistic Visions of Global Citizenship、（国際学術会議）、2015.６．12 － 13 、Department of Modern Languages, University of Birmingham, UK（バーミンガム、英国）

[図書] (計５件)

① SHIBATA, Yoshiko 他、*Dragons at the Crossroads: Caribbean Experience*、Cambridge Scholars Publishing 、2017 （予定）、“Searching for a Niche: The Chinese Diaspora in the Caribbean、Interview of Yoshiko Shibata,” by Dr. Paulette Ramsay (chief editor of the book)

② 柴田　佳子、他、丸善出版、『華僑華人の事典』、2017（予定、確定）（項目「カリブ海の華僑華人」）

③ 柴田　佳子、他、丸善出版、『世界の暦文化事典』、2017（予定、確定）（項目「ジャマイカ」、「ガイアナ」）

④ 柴田　佳子、他、新評論、『ラテンアメリカ　２１世紀の社会と女性』、2015、392

⑤ 柴田　佳子、他、東京外国語大学出版会、『山口昌男―人類学系思考の沃野』、2014、506（200-218）

６．研究組織

（１）研究代表者

柴田　佳子（SHIBATA, Yoshiko）

神戸大学・大学院　国際文化学研究科・教授

研究者番号：３０１８３８９１